



私の学生時代は当然ながらアナログ・オーディオ全盛の時代で、デジタル・オーディオの先駆けとなるPCM録音の技術がやっと紹介され始め、民生用でPCM録音のできる装置が、確か百万円台で発売されていた気がする。今やスマホで簡単に撮れてしまう動画であるが、もちろん、家庭用のビデオ装置などはまだまだ一般的ではなかった。

その時代にオーディオに凝るなんてのは、

道楽息子どうれくむすこか、金持ちの隠居いんきよがすること、貧乏学生がすることではなかった。とてもお金がかかる趣味であったといえる。

その学生時代に、町の電気屋さんだったY氏に無理をお願いして、分割払いでこつこつと手に入れたのが、デンオンのDDプレーヤーダイレクトドライブ（DP5000F）と、同じくデンオンのMCカートリッジ（DL103）、トーンアーム（DA303）〜当時NHK等の放送局が音楽番組で使っていた機材〜と、A級とB級の切り換え

ができ、MCカートリッジ専用のイコライジング・アンプを備え、ピークで120Wの出力が得られるヤマハのプリメイン・アンプ（CA2000）、そしてデンオンの二トラック三十八センチで録音再生ができるオーブン・リール・デッキ（DH610S）、スピーカーはダイアトーン（DS25IMK II）であった。いづれも当時名機といわれたモノで、オーディオ・ファンであれば恐らく『あれか』とうなづいていただけるだろう。

因ちなみにロングピースが百円位の時代に、デンオンのDH610Sが定価¥295,000-（もちろん消費税なんて無粋ぶすいなものはない）であったのを考えると、「道楽」の意味が多少なりともお分かりいただけるかと思う。

学生時代、私は新聞配達店に住み込んで、毎日朝刊と夕刊とを配達し、月末には二百件を越える配達先から集金をしながら大学に通うという生活をしていた。そんなこともあつ

て、酒もパチンコも麻雀も映画も〇〇〇も、一切の学生的な娯楽（と勉強）をしないで、稼いだ金のほとんど全てをオーディオ機器の購入とビートルズを始めとするレコードを買うために使っていた。

幸いにも、（と、今になつては思えるのだが）こうした環境のため、じゆうじかん自有時間はなかったが、お金に苦勞はしなかった。住むところもあり、食事も提供され、学費も支給され、しかも毎月給料が入る。時間に拘束こうそくされることを除けば、かなり豊かな学生時代だったといえるだろうことは確かだ。でなければ、学生時代にこれ程のオーディオ装置そろを買い揃えるなど到底とうていできはしなかつたはずだ。

大学時代に苦勞して自分のステレオを手に入れるまでは、我が家にステレオなどなかった。どうやって音楽を聴いていたかというと、もっぱらAMのラジオ放送で、高校時代にはFM放送すらまだ試験放送段階の時代だったのだ。

## 閑話休題 かんわきゅうだい

そのステレオで初めて「 $\text{1} \equiv \text{2} \text{ } \text{2}$ 」を聴いたときの感動は、結構ハイなモノであったのを今でも記憶している。特にポールのマウス・ベースの低音の響ひびきに……

マウス・ベースと言うのは“Mouth-Bass”と書く私の造語である。

何故マウス・ベースかというと、まるで口でベースの音を出しているかのように聞こえるからである。子供の頃によく下唇したくちびるを人さし指で（特に人さし指でなければならぬ理由はないが、親指だとやりづらい）弾はじいて音を出して遊んだ事があると思うが、その時に喉のどを絞しぼってベースに似た低い音を出す、一体そんな感じの音である。だから私はこの音をマウス・ベースと名付けたわけだ。

このベース音は「 $\text{1} \equiv \text{2} \text{ } \text{2}$ 」の丁度二小節目の二拍目から始まるのだが、とにかく暖かい

感じの音なのである。『大人の音なのだ』な  
どと、下らない洒落をいたくなるくらいに  
心地好い音なのである。

先に書いた通り、ステレオを手に入れる前  
の私は、主にFMラジオを通じてしかビートル  
ズの音楽に接していなかった。それで、ステ  
レオで聴くこのベース音は、それまでに気付  
くことのできなかつた音なのであった。とこ  
ろが今、スピーカーから流れてくるのは、聴  
きなれたポールのカールホフナーのバイオリ  
ン・ベースとは明らかに異なるベース音であ  
る。これは一体なんなんだろう？

そのころ明治大学法学部に通っていた中学  
以来の友人に、Oがいた。彼はそれまで野球  
しか興味のなかつた私にビートルズの話を見  
かせてくれた奴で、その後の私のビートルズ  
好きを決定づけた男である。このOに、「  
二のマウス・ベースの話をした処、怪訝な  
顔をする。私よりビートルズを聴き込んでい

ると思っていたOにも初めての指摘してきらしく、  
それならもう一度二人で「ミニミニ」を聴き直  
してみようということになった。

Oはというと秋葉原で買い込んできた、安  
価なステレオでビートルズを始めとするマー  
ジー・ビートを中心に楽しんでいた。確か、  
トリオのベルト・ドライブのプレーヤーに極  
く普通のナガオカの針の付いたカートリッジ  
でアンプもトリオだったと思うが、要するに  
当時の学生の極く一般的なステレオの構成で  
あった。

或る日、西荻窪の下宿から遙々はるばるやってきた  
Oと、私のステレオで徐おもむろにホワイト・アルバ  
ムを開いて、一枚目B面の最後から二曲目の  
溝に針を下ろし、「ミニミニ」を聴き始めた。

『な、マウス・ベースだろ？』  
ときく私に

『ウーン』

と言ったまま聴き続けていたOが、二三度にさんど

聴き直した後だったろうか

『確かにそう聞こえるナー』

といった。

それ以来二十年近く、自称ビートルズ通を名乗る人が現われる度に、<sup>ヒロウ</sup>「ミニ」のマウス・ベースの話を披露し、意見を求めてきたが、誰一人明快な答えをくれなかった。

もちろん人に訊いて歩くだけが脳じゃないのはよく分かっていたので、実証的行動として「ミニ」の載っている『ビートルズ完全レコード・コピー』なる楽譜集を始めとする、私の手に入れられる限りの、謎を解いてくれそうなビートルズ関連書籍を集めてみたが、完全レコード・コピー楽譜にすら、<sup>エレキベース</sup>「E. Bass」としか記されていないかった。

そうこうしている間に結婚し子供が生まれ、大切なステレオを子供が玩具にして針を折ったり、オープン・デッキに落書きをしたり

生活が続き、その間にオーディオの世界はアナログからデジタルへと移ってしまった。

最近になってやっと子供も大きくなり、いろんな意味で余裕ができてきて、再びこの二十年来の「ミニ」の謎解きに挑戦し始めた。

そんな環境の中、今の職場でビートルズ・オタクとも言えるT君と出会うこととなり、私の謎解きも実現間近と思われた。なんせ彼はビートルズ・ファンクラブに入会していて、毎月ファンクラブから様々な内容の載った会報が送られているのだから。そんな中にきつと私の二十年来の疑問に答えてくれる情報があるに違いない。そう思ったのだ。

ところが、世の中はそんなに甘くないのが常らしい。T君にもマウス・ベースの話をしたが、二十年前のOよろしく、これまた怪訝けげんな顔が返ってきた。

どうもマウス・ベースの話はビートルズ・ファンの間でもポピュラーでは無いらしい。